

【報告書】

地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ

／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドネット・ラウンジ企画

人間・動物・モノのあいだ——境界の人類学

【日時】 2013年2月2日（土）14:00-20:00

【会場】 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306 MM セミナー室

【発表者要旨】

中村美知夫（京都大学）

「類人猿はかつて人間だった？—西洋文化＝科学における『人間』の境界の変遷」

人間と動物の境界的存在としては、いくつかのものが考えられるが、「人間的」要素を持つ動物、たとえば類人猿もその一つである。本発表では、リンネの『自然の体系』などの文献を中心に、西洋文化の中でチンパンジーや類人猿がどのように見られてきたのかを概観しつつ、チンパンジーの学名の変遷を紹介した。古代西洋における半人半獣の存在はネガティブなイメージで語られていることが多く、類人猿が西洋に知られるようになってからは、それら半人半獣の神の名前を学名に冠することで、そうしたイメージが継承されてきた可能性がある。西洋においては、人間と動物の境界的な類人猿は不気味な存在であったと考えられ、また、そうした文化的価値観は科学的営為にも影響してきたと言えるだろう。学名や科学的分類体系は必ずしも「客観的」で「正しい」ものであるとは限らず、むしろ文化的・歴史的な背景の中で形作られてきたものとして捉える必要がある。

須田征志（名古屋大学）

「ひょうたんはモノなのか？—人間とモノの境界」

東アフリカ・タンザニアの北東部に位置するルショト地域に居住するサンバア社会で、ムガンガ(*Mganga*)と呼ばれる呪医は、様々なモノを「薬」を保存する容器として活用している。

その一つである「ひょうたん(*kivuyu*)」は、昔から家庭用品として利用されていたが、現在は、入れ物や容器としての需要をプラスチックや陶器などの工業製品に奪われ、日常生活の中から姿を消し始めている。しかし、このような生活様式の近代化にともない、工業製品が簡単に手に入る今日においても、ムガンガと呼ばれている呪医は、ひょうたんを呪物化し利用している。

この呪物化されたひょうたん(*tunguri*)には、周辺民族の名前や性別が付けられ、表面には彼らが好む装飾や顔の彫刻などが施されているものが多いが、なかにはレントゲン機器(*X-Ray*)という名前のひょうたん(*tunguri*)がある。このレントゲン機器という名前のひょうたん(*tunguri*)にも同様に性別が与えられ、装飾や彫刻が施されている。

以上のことから、ひょうたん(*kibuyu*)を呪物化されたひょうたん(*tunguri*)に変化させる際に

必要な「力」を取り込むための対象に過程に焦点を当てると、サンバア社会の呪医の呪術的想像力においては、レントゲン機器においても性別を付与するなど、周辺民族（人間）とレントゲン機器（モノ）の境界は存在せず、むしろ同等に見做しながらその「力」を取り込んでいる状況を提示する。

保坂和彦（鎌倉女子大学）

「捕食とカニバリズムの境界—チンパンジーにとって殺して食べるサルとは何者か」

チンパンジーがサルを殺して食べることを捕食、同種の子を殺して食べることをカニバリズムとよぶ。カニバリズムの光景はサルの肉を分かち合う場合と違いがない。すなわち、彼らの内面に実在した殺すことへのためらいの違いとしての種の境界は、肉となった死体を前に消失する。この現実には、チンパンジーの内面において仲間／非仲間、非食物／食物の境界が揺れ動くものであることを物語る。

たとえば、チンパンジーとヒヒ（非仲間、非食物）が長く近接すると、関係性が生成し、遊びなどが観察される。ところが、同じヒヒを捕食することもある。つまり、チンパンジーにとってのヒヒは境界を跨いで仲間にも食物にもなれる存在である。

また、狩猟の途中、怪我をしたコロブス（非仲間、食物）を前に、チンパンジーが殺すのを止めてしまう現象が稀に観察される。狩猟が敵対的交渉をもたらした結果、逆説的に、サルが仲間の領域に越境する瞬間が生じ、殺せなくなるとする解釈も成り立つ。

*当報告の内容は、それぞれの著作の著作物です。Copyrighted materials of the authors